

関わらなければ

「ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、・・・」
(ルカの福音書 10 章 33 節)

かのマザー・テレサが残したと言われる名言の一つに「愛の反対は憎しみではなく、無関心です」というものがあります。これを逆から言えば、愛することはまさに関心を持つことである、ということになるのではないのでしょうか？

上掲のみことばを含む“良きサマリヤ人”のたとえに出てくる祭司やレビ人は、ある意味、無関心を装って向こう側を通り過ぎてしまいました。しかしながら、あるサマリヤ人は、それなりの犠牲を覚悟しながらも、倒れているユダヤ人に関心を抱き、あえて関わりを持ったのではなかったのでしょうか？そうして彼は、隣人愛、いや“敵を愛する愛”を示しました。人は他者と関わることで、愛を示すことができるのです。

11歳でハンセン病を発病し、国立療養所大島青松園に入所するかたわら、多くの詩を紡いだ詩人、塔和子さんの「胸の泉に」という詩を分かち合いたいと思います。

胸の泉に

かかわらなければ、この愛しさを知るすべはなかった。この親しさは湧かなかった。この大らかな依存の安らいは得られなかった。この甘い思いやさびしい思いも知らなかった。人はかかわることからさまざまな思いを知る。子は親とかかわり、親は子とかかわることによって。恋も友情もかかわることから始まって、かかわったが故に起こる。幸や不幸を積み重ねて大きくなり、くり返すことで磨かれ、そして人は人の間で思いを削り、思いをふくらませ、生を綴る。ああ何億の人がいようとも、かかわらなければ路傍の人。私の胸の泉に枯れ葉いちまいも落としてはくれない。

人を癒すことはできないが、病院に連れて行くことはできる

「ナタナエルは彼に言った。『ナザレから何の良いものが出るだろう。』ピリポは言った。『来て、そして、見なさい。』」(ヨハネの福音書1章46節)

まだ子供たちが小さかった頃、夜中に、突然、子供が熱を出したり、急に腹痛を訴えてきて、あたふたしたことや、うろたえたことが何度かありました。しかし、そんな時、家内が夜間診療をしている病院を調べて見つけ、やっとのことでそんな病院に子供を車で連れて行き、とりあえず病院の入口で家内や子供を降ろした後、私自身いかに安堵し、ホッとしたことでしょうか？病院には、医者や看護師をはじめ、信頼できる医療従事者の方々がいるからです。

上掲のみことばにおいて、ピリポがメシア＝キリストに会ったことをナタナエルに伝えたところ、「ナザレから何の良いものが出るだろう」と言って彼は取り合いませんでした。しかしながら、ピリポはそんなキリストが本物であることを確信していたので、ナタナエルにこう言ったのです。「来て、そして、見なさい」。すなわち、それは「来てみれば、必ず分かるだろう」という意味だったのではないのでしょうか？

私たちは、人を直接、癒したりすることはできません。しかし、必要かつ適切な治療のために、その人を病院に連れて行くことはできるのではないのでしょうか？ほぼそれと同じような意味で、私たちは人を直接、救うことはできません。しかしながら、あのピリポがナタナエルをイエス・キリストのもとに連れて行ったように、私たちもその人をキリストのもとへと連れて行くことはできるのではないのでしょうか？

ぜひ、今日から始まる今週も、あなたにとってのナタナエルを、キリストのもとへ、キリストの(いる)教会へとお誘いいたしましょう。「来て、そして、見なさい」と。

敵を愛する？

「自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。」

(ピリピ人への手紙2章4節)

ロシアで行なわれているサッカーW杯(ワールドカップ)での西野ジャパンの奇跡的な大勝利に酔いしれている方も少なくないのではないのでしょうか？正直、私もその一人でした。対戦相手のコロンビアは強豪国であり、到底勝てるとは思っていませんでした。しかし、自宅で仕事をしながらテレビ観戦していた私は、試合前半初期における相手チームのハンドによるPK(ペナルティ・キック)での先制点獲得や、それに伴うレッドカードによって相手チームが一人少なくなってしまった日本の有利な状況に、大いに喜びと期待を感じておりました。結果的に、日本は2対1で、前回大会で大敗を喫しているコロンビアに思わぬ勝利を収めたのです。

ところが、その後、私は喜んでばかりはいられないことにハッとさせられました。それは“敵を愛する”というテーマについて、茨城で行なっている聖書の学びでの時でした。ある教会の姉妹が、あの試合の際、クリスチャンではないご主人がコロンビアのハンドをしてしまった選手のことを心配していたと語っていたのです。確かに、コロンビアと言えば、かつて1994年のサッカーW杯アメリカ大会で、オウン・ゴールをしてしまった選手が帰国した際、射殺されてしまうという大変痛ましい事件があったではありませんか？

物事は、ただ自分の側からだけでなく、時に、反対側、相手側からも見る必要があるのではないのでしょうか？ぜひ、あのハンドをしてしまった選手が、できれば今後の試合で活躍して汚名返上し、身の安全が守られますよう、お祈りしたいと思います。

斧を研ぐ？

「新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れなければなりません。」

(ルカの福音書 5 章 38 節)

とても努力しているのに、何か上手くいかない。一生懸命やり続けているのに、今一成果が上がらない。そんなことはないでしょうか？そのような時は、一度、やり方や方法そのものを見直してみるのも意味があるかもしれません。

「がんばる木こり」という話があります。・・・一人の新人の木こりが親方から斧を与えられ、森に入って木を切り倒すことになりました。その日、彼は努力して 18 本もの木を切り倒しました。「よくやった。その調子だ！」との親方のねぎらいの言葉に気をよくした彼は、翌朝、早めに起床して誰よりも早く森へ入りました。しかしながら、努力も虚しく、その日は 15 本が精一杯でした。疲れているのかもしれないと思った彼は日暮れと共に床に入り、「今日こそ 18 本を越えるぞ」と意気込んで森へと入りましたが、結果はその半分にも及びませんでした。一生懸命努力はしているものの、その次の日は 7 本、そのまた次の日は 5 本、夕方まで休みなしで働いても 2 本という日もあった始末です。彼は恐る恐る、「これでも一生懸命やっているんです」と、親方にその結果を報告に行きました。すると親方は逆に、その新人の木こりにこう尋ねたのです。「最後に、斧を研いだのはいつだ？」。彼は答えました。「斧を研ぐ？そんな時間はありませんでした、何せ、木を切り倒すのに精一杯でしたから・・・」。

私たち”御茶の水”は今年、教会創立 70 周年という節目を迎えました。今までの過去の歴史に学びつつ、今、まさに未来へ向けて歩み出そうとしています。その際、今までのやり方、方法を継承すると共に、その見直しも必要なのではないでしょうか？

先を行く者の苦悩と喜び

「その方は私のあとから来られる方で、私はその方のくつのひもを解く値うちもありません。」
(ヨハネの福音書 1 章 27 節)

上掲の言葉を語ったのは、いわゆるバプテスマのヨハネです。彼は主イエス・キリストをここで「あとから来られる方」と表現しています。おそらく、そこには“真打”とか“本命”などというニュアンスが込められていたのではないのでしょうか？

ところで、主イエスの立場から見れば、当のバプテスマのヨハネは、ある意味、「先を行く」人ではなかったのでしょうか？よく言えば、先駆者、後から来られる方に重きを置いて言えば、“前座”、“露払い”的な存在と言えるかもしれません。

そんな「先を行く」バプテスマのヨハネ、そこには、それなりの苦悩もあれば、喜びもあったのではないのでしょうか？過日行なわれましたピョンチャン冬季オリンピックで日本に金メダルをもたらしましたパシュートという競技を覚えていらっしゃるのでしょうか？風の抵抗を受けて体力を消耗する先頭が入れ替わり立ち代りするあの競技です。そこからも分かりますように、「先を行く」ということは、ある意味、多くの抵抗を受ける中で、文字通り「風穴を開ける」働きであり、そこには想像を絶する苦悩があるのではないのでしょうか？ヨハネは使命を持ってその困難な働きに徹したのです。

と同時に、「先を行く」者には、それなりの喜びも伴うものではないかと思えます。

杉本昌隆氏をご存知でしょうか？彼こそは、今をときめく将棋界のプリンス、藤井聡太七段を育てた師匠です。彼は弟子の活躍を心底、喜んでいます。ヨハネもまた最終的には、後から来られたキリストの働きに喜びを感じたのではないのでしょうか？

私たちがまた、教会創立 70 周年の今年、先駆者たちの苦悩と喜びを覚えましょう！

驚くべき恵みの背後にある驚くべき損失

Amazing Grace

Amazing Loss

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちたおられた。」
(ヨハネの福音書1章14節)

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」
(ヨハネの福音書3章16節)

「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」
(ヨハネの手紙第一3章16節)

私たちの救いは、あの有名な讚美歌でも歌われておりますように、“Amazing Grace(Amazing Grace)”、「驚くべき恵み」そのものです。本来、滅びてもおかしくない私たちが、主なる神の驚くべき恵みによって救われたのですから。

ただ、私たちはともすると、そんな恵みの上に胡坐(あぐら)をかいてしまっていないでしょうか？神学者ディートリッヒ・ボンヘッフアーは、そんな状況を「安価な恵み」と評しました。私たちキリスト者が恵みをただ受けるだけで、それに応答しようとせずに、その恵みをあたかも安っぽいものに行っているということです。

よく考えてみて下さい。実は、私たちに与えられている「驚くべき恵み」は、裏を返せば、神の「驚くべき損失」(Amazing Loss)なのです。すなわち、それは上掲のみことばの上から、神の受肉、愛する一人子の犠牲、そしてキリストの十字架なのです。

使命に生きる

「私にとって、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」

(ピリピ人への手紙1章21節)

「兄弟たちよ。私はすでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ、この一時に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」(同3章13～14節)

先日の山森陽子姉の告別式において、家内が水戸の斎場職員の方とこんなやりとりをしていたことを後で聴きました。・・・職員の方が「4、5、6月のこの時期は、お葬式が少ないんです」と言ったのに対して、家内が「どうしてでしょうかね?」と聞き返しますと、その職員の方は「田植えの時期ですから」と即答したというのです。

人は、何か為すべきこと、もっと言えば、使命感(mission)や責任感(responsibility)をしっかりと感じているならば、なかなか死ねない、いや生きる気力が湧いてくるということなのではないでしょうか?

この度、若くして天に召された山森陽子姉は、もしかしたら、その体調の悪化からして、もっと早く天に召されていてもおかしくなかったかもしれません。しかしながら、姉妹には、愛するご主人を救いへと導きたいという、並々ならぬ使命感と責任感がありました。それゆえ、姉妹はご主人の救い(バプテスマ)を見届けるまでは、天に召される訳にはいかなかったのでしょう。

現に、山森陽子姉は、奇跡的に病室からの一時退室が認められ、ご主人のバプテスマをその目でしっかりと見届けたのです。そして、そのわずか一週間後、地上での最後の使命を為し終え、ご主人との天国での再会を確実にして、天に召されたのです。

キリストの(ような)教会

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

(ヨハネの福音書 14 章 6 節)

歴史は、ある偉人が伝えた素晴らしい教えを後の弟子たちやその後設立された団体が骨抜きにし、形骸化させてしまう傾向があることを如実に伝えていきます。この傾向は、ある意味、イエス・キリストと後のキリスト教(あるいは教会)にも当てはまるのではないのでしょうか？

さらに、言えば、私たちの群れである“キリストの教会”も、当初は教会改革運動としての「聖書復帰運動」(ストーン・キャンベル運動)を経て、極めて純粋な動機で始まったものの、後の歴史的な過程において、残念ながら様々な事情により分裂してしまったり、あるいはカギカッコ付きの「キリストの教会」として形骸化してしまっている事実を認めざるを得ません。

教会史家ヤロスラフ・ペリカンは、“伝統”と“伝統主義”の違いを次のように定義しています。「“伝統”とは、既に死んでしまった人々の今も生きている考え方であり、“伝統主義”とは、今を生きる人々に巢食う死んだ考え方である」と。

はたして、私たち“キリストの教会”は、いい意味での“伝統”ではなく、形だけの“伝統主義”に生きていないかどうか、改めて吟味したいものです。そのためにも何度でも、その原点に立ち返る必要があるのではないのでしょうか？ちなみに、そんな原点とは、復帰運動の最初ではなく、ペンテコステに始まる教会誕生の原点です。

私たちが目指すべきは、カギカッコ付きの「キリストの教会」ではなく、“キリストの(ような)教会”であるべきではないのでしょうか？

ナスルディンのカギ

「『立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。・・・』しかしヨナは、主の御顔を避けてタルシシュへののがれようとし、立って、ヨッパに下った。・・・」
(ヨナ書1章2～3節)

「ナスルディンのカギ」と呼ばれる次のような寓話があります。・・・ナスルディンと言う名の男が自宅前の土の上で一糸懸命、探し物をしていました。ちょうどそこへ友人が来て聞きました、「何を探しているんだい?」。ナスルディンは「カギだよ」と答えました。そこで、友人も一緒にカギを探し始めました。しかし、なかなか見つからないので、友人は「本当にここでなくしたのか?」と聞きました。するとナスルディンは「いや向こうの草むらだよ」と言うではありませんか。「じゃ、何でここで探しているんだ」と言う友人に対して、ナスルディンはこう答えたのです。「だって、ここの方が明るくて探しやすいからさ!」。

案外、私たちもナスルディンと同じようなことをしてしまっていないでしょうか?問題がある場所は薄々分かってはいても、怖くて、あるいは面倒で、そこにはなかなか切り込めない。ゆえに、行きやすい場所で、何とかしようとしてまう。しかし、問題の本質はそこにはないので一向に解決にはならない、といった具合です。

上掲のみことばに出て来る預言者ヨナも、本来行くべき場所はニネベと分かってはいても、その誤まった愛国心や恐怖心などから、つい逆方向へと行ってしまいました。繰り返しますが、私たちも、多かれ少なかれ、そんなヨナやナスルディンのようなところがあるのではないのでしょうか?しかしながら、それでは解決になりません。

「ヨナは、主のことばのとおり、立ってニネベに行った」(ヨナ3章3節)。願わくば、変えられたヨナのように意を決して、改めて行くべき場所に行きたいものです。

置かれた場所で伝えなさい！

「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」

(テモテへの手紙第二 4 章 2 節)

先週の火曜日(5/1)に素晴らしいことが起こりました。それは、現在闘病中の山森陽子姉のご主人・山森亮吾さんがイエス・キリストを自分の救い主と信じて、バプテスマされ、クリスチャンになられたことです。神のくすしき救いのみわざをほめたたえずにはおられません。何と、病院からの一時退室が認められ、陽子姉立ち会いのもと、山森亮吾兄が誕生しました。

山森陽子姉は闘病前からご主人の救いのために祈り続けてはおりましたが、むしろ、入院後にますます熱心にご主人へ福音を伝え、その救いを切望し、祈り続けて参りました。そして、無念の延期を挟みまして、この度、仕切り直しで、ついに、めでたくご主人がクリスチャンになられたのです。私は思わず、上掲のみことばを山森陽子姉の病床伝道に重ねました。一般的に、病床伝道とは、病床にある人に対して伝道するものですが、山森陽子姉の場合は病床からの伝道です。まさに、姉妹は「時が良くても悪くてもしっかりと」、ご主人に「みことばを宣べ伝え」たのではないのでしょうか？

長らく『使徒の働き』からの連続講解説教をして参りましたが、その最後は、パウロの軟禁伝道の様子を次のように伝えて終わっております。「こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」(使徒の働き 28 章 30～31 節)。

ぜひ、私たちも、パウロの如く、山森姉のように、置かれた場所で伝えましょう！

長い目で見る

「イエスは答えて言われた。『わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。』」

(ヨハネの福音書 13 章 7 節)

今まさに散歩するのに持って来いの季節になりましたが、その昔、こんな話を聞いたことがあります。・・・ある一人の中年女性が散歩に出かけました。途中、美味しそうな焼き立てのクッキーを一袋買い込み、公園のベンチでおやつタイム、今流行りの言葉で言えば、“モグモグタイム”をすることにしました。生憎、どのベンチも人がいましたので、仕方なく、一人の青年が先客として座っていたテーブル付きベンチに相席の許可をもらって座りました。早速、近くの店で買ったクッキーの袋に手を伸ばし、食べ始めました。その美味しいことと言ったらありません。思わず何度も袋に手を伸ばしてしまいます。すると、こともあろうか、隣の青年が袋に手を伸ばしてクッキーを頬張るではありませんか？「まったく」と心では思いながらも、表情は「どうぞ」と、何とか寛容を装いました。ところが、この青年、何と自分が手を伸ばす度に、彼も手を伸ばして来るのです。しかも満面の笑顔で!? ずうずうしいと言ったらありません。ついにクッキーは最後の一枚になりました。最後ぐらいはと彼女が手を伸ばすと、なんと数秒早く彼の手がそのクッキーをつかんでいたのです。堪忍袋の緒が切れた彼女は、ついに彼を睨みつけて言いました、「すみませんが・・・」。と、その時、何と、自分のバッグに手の付けられていない同じクッキー袋が見えたのです！

私たちはせっかちで、結論を急いでしまうことが多々あります。しかしながら、少し落ち着いて、長い目で見ていく時に、意外な真実が見えてきたりしないでしょうか？日々の歩み、信仰生活においても同じです。主にあって忍耐し、見極めましょう。

問題を課題とする

「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」
(ピリピ人への手紙4章13節)

二週間ほど前に参列しました大学の入学式で、学長がその式辞の中でこんなことを話しておりました。高校生までは「問題」を解くことをしてきたと思いますが、大学生の諸君はこれから「課題」に向き合っていくのです、と。要するに、問題と課題は違う、ということでしょう。このことをさらに吟味してみました。

「問題」はどちらかと言えば、期せずして私たちに与えられたり、ふりかかってくるもので、何とか解決しなくてはなりません。それは英語で言えば、**Question**(問い)であり、**Problem**(災難)ではないでしょうか？

それに対して、「課題」は、与えられたり、ふりかかってくるというような、ある意味、受動的、受身的なものではなく、むしろ、こちらから主体的に向き合い、対処していくものなのではないでしょうか？場合によっては、自らにそれを課すこともあり得ましょう。英語で言えば、それは **mission**(使命)であり、**task**(任務)です。

正直申しまして、私たちの人生、そして、信仰生活には、決して「問題」がない訳ではありません。いや、むしろ、山積しているのではないのでしょうか？しかしながら、私たちはそのような「問題」をただネガティブに、ふりかかってきた<災難>として受け留めるのではなく、可能ならば、主にあつて、それらを「課題」、すなわち、自らの<任務>あるいは<使命>として、より主体的に受け留め、前向きにそれらに向き合っていきたいものです。なぜならば、上掲のみことばにありますように、「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできる」からです。ハレルヤ！

夢を諦めない！

「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは・・・。」
(ルカの福音書 18 章 1 節)

“I Have a Dream.”、「私には夢がある」の名演説で知られ、米国で人種差別のない社会の実現を訴えた公民権運動の父、マーティン・ルーサー・キング牧師が、テネシー州メンフィスで暗殺されて、今年(2018 年)でちょうど 50 年になります。1968 年の 4 月 4 日午後 6 時 1 分、アフリカ系アメリカ人の清掃作業員の待遇改善などを求めるデモ行進のためにメンフィスに来ていたキング牧師は、宿泊していたロレイン・モーテル(⇒現在は公民権博物館)のバルコニーで深呼吸をした瞬間、39 歳の若さで凶弾に倒れたのでした。

そこから遡ること五年前の 1963 年 8 月 28 日、キング牧師はワシントン D.C.のリンカーン記念堂にて、25 万人近い観衆を前に演説をしました。その時の演説が歴史に残る “I Have a Dream.”、「私には夢がある」の演説です。奴隷解放を実現したリンカーン大統領の話から始めた彼は、ついにその夢を語ります。「私には夢がある。それはいつの日か必ず、かつて奴隷の息子と奴隷所有者の息子が、真の兄弟として同じテーブルに腰を降ろすことだ・・・」。

現在の米国はそんなキング牧師の夢と逆行しているようにも見えますが、少し前にアフリカ系アメリカ人初のバラク・オバマ大統領が誕生したことは、少なからずキング牧師の夢が継続していることを米国と世界に知らしめたのではないのでしょうか？

公民権運動も悪くありませんが、私たちは改めて、“聖書復帰運動”という夢の実現を決して諦めてはいないということを、その歩みの中で示して参りましょう。

沈黙のメッセージ

「彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」
(イザヤ書 53 章 7 節)

「沈黙は金、雄弁は銀」ということわざもあるように、沈黙は雄弁以上に意味があり、時に重いメッセージを発することがあるのではないのでしょうか？まさに、主イエス・キリストの沈黙には、重大なメッセージが含まれていました。

たとえば、あのカナン(スロ・フェニキヤ)の女性が悪霊につかれた娘のことで主イエスに懇願してきた際、主イエスは「一言もお答えにならなかった」(マタイ 15:23)とあります。しかしながら、その後の展開から分かりますように、この沈黙は単なる拒絶ではなく、むしろ、この女性から後々「りっぱ」な「信仰」(同 15:28)を引き出していただくための訓練だったのです。あるいは、あの姦淫の現場で捕らえられた女性の即席裁判の席上、その女性をどうするんだとの怒号が飛び交う中、主イエスは黙って「身をかがめて、指で地面に書いておられた」(ヨハネ 8:6)とあります。やはり、その後の展開から、ここで主イエスは沈黙のうちに、女性を訴える者たちに自制と自省を促していることが分かります。

そして、何よりも、十字架に向かう受難の中、あるいは十字架上で、主イエスはほとんど語られることはありませんでした。まさに、その姿は預言者イザヤが伝えたメシア預言の通りです。その無言の姿勢は、その沈黙は、むしろ雄弁に、私たちの罪を背負って下さっているとのメッセージを発していたのではないのでしょうか？

私たちも時に、沈黙のうちに誰かに寄り添い、また、みこころに従いたいものです。

復活の希望ある限り永遠に若く・・・

「イエスは言われた。『わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。』」 (ヨハネの福音書 11 章 25 節)

主にあって「死んでも生きる」ことを信じる復活信仰は、一体、何のためにあるのでしょうか？もちろん、復活自体は死後のことですが、そんな復活を信じる信仰は、むしろ、今をより良く生きるためにこそあると言えるのかもしれない。

あのホロコーストを生き抜いた『夜と霧』の作者ヴィクトール・フランクルは、かつて強制収容所にいた際、クリスマスに解放されるという噂が流れ、囚人たちがにわかに活気づいたことと、その後、その噂が事実でないことが分かると多くの人々が絶望して死んでいったことを通して、人が生きることにおいて希望がいかに大切であるかを悟りました。キリスト者にとりましては、それ以上に、復活の希望にこそ大いなる意味があるのではないのでしょうか？そんな究極の希望によって、キリスト者は仮に絶望的な環境にあっても前向きに生きることができるのです。

詩人サミュエル・ウルマンは、「青春」という詩の中で次のようにうたっています。人は信念とともに若く、疑惑とともに老いる。

人は自信とともに若く、恐怖とともに老いる。

人は希望ある限り若く、失望とともに老い朽ちる。

私たちキリスト者は、復活の希望がある限り、高齢でも靈的に若く、晩年でも靈的な青春を生きることができるのです。まさに、そのためにこそ、私たちの救い主イエス・キリストは、十字架上で私たちの罪を贖い、人類最大の敵とも言うべき死を打ち破って、復活して下さり、私たちに天の国籍、復活の希望を与えて下さったのではないのでしょうか？そして、「この希望は失望に終わることはありません」(ローマ 5:5)。

渋滞のメカニズムに学ぶ

「そのとき、イエスは彼らに命じて言われた。『パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい。』」 （マルコの福音書8章15節）

最近、あるテレビ番組で、なぜ自然渋滞は起きるのか、を検証する興味深い試みが紹介されておりました。自然渋滞の多くは、感覚的にほぼ認識できない緩やかな坂道での減速等が要因になっているようです。そして、もう一つ大きな要因として、わずか一台の車による無理な割り込みが他の車のブレーキングや減速の連鎖を巻き起こし、とてつもない渋滞を引き起こしていることが紹介されておりました。

たった一台の車による無理な割り込みが引き起こす大渋滞。もしかしたら、同様なことが、私たちの社会にも起こり得る、いや、現実には起こっているのではないのでしょうか？社会におけるヘイト・スピーチが巻き起こす差別の問題、クラスにおけるネガティブ・ワードによる学級崩壊やいじめの問題。

場合によっては、教会の中でも、そのようなことが起こり得るのではないのでしょうか？神を畏れず人を恐れる風潮、他者（ひと）を裁く傾向、何事も後ろ向きな見方などなど。そういうものが知らず知らずのうちに教会内に負の連鎖を巻き起こしてしまっている可能性は決して否めないと思います。

上掲のみことばには、主イエスが弟子たちに対してパリサイ人やヘロデの“パン種”に気をつけるよう警告した場面が描かれています。パン種は聖書の中で神の国の拡大の如く良い意味で出てくることもあります。罪の拡大のたとえとして悪い意味でもしばしば登場します。僅か一つかみのパン種（=イースト菌）がパンを大きく膨らますように、ほんの一部のネガティブな考え方や、後ろ向きな見方が、周囲に悪い影響を大きく与え得るということではないのでしょうか？我々キリスト者も心したいものです。

汝の敵を愛せよ

「『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」 (マタイの福音書5章43～44節)

かつて大阪に「汝のテキを愛せよ」という看板のステーキハウスがありました。そんなテキ(=ステーキ)ならいくらでも愛せるという方もいるでしょう。ステーキハウスの看板なら洒落になりますが、敵を愛するとなると洒落にならないほど困難です。

ただ、一つ覚えておくべきことは、「愛する」とは必ずしも「好きになる」ことではなく、むしろ、愛する対象を「大切にする」ことであり、「尊重する」ことなのではないでしょうか？主イエスは決して敵を好きになれと言っているのではなく、敵やライバルを時に人として重んじなさいと言っているはずです。

あの平昌オリンピックでも、そんなことを垣間見せてくれたシーンがいくつかあったのではないのでしょうか？例えば、女子ジャンプで銅メダルを獲得した高梨沙羅選手のもとに駆け寄って、自分のことのように涙を流してライバルを祝福した伊藤有希選手の姿。あるいは、いい結果を残せた自分のレース直後、次に滑る最大のライバル、韓国のイ・サンファ選手のために、歓喜に湧き上がる日本応援団に対して静粛を促したスピード・スケート女子500m金メダリストの小平奈緒選手の姿勢、などなどです。

ちなみに、ライバルの語源は“リバー”、すなわち「川」です。一つの水源地を巡って二者が対立したことから、そうなったとされています。願わくば、ライバルの窮地を「対岸の火事」とせず、愛の手を差し伸べる者になりたいものです。そのような人は、仮に試合に負けても、人生において勝利者となれるのではないのでしょうか？

前を向く

「さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐに向けられ(た)。」 (ルカの福音書 9 章 51 節)

あの未曾有の被害をもたらしました東日本大震災から、今日(2018年3月11日)で七年になります。今なお故郷に帰れなかったり、行方不明者の方々も大勢おられます。また、心に大きな傷を持ち、日常生活もままならない方が少なくないようです。そんな中、被災地や被災者の中から頻繁に上がった声、現在も上がり続けている声は、「前を向く」です。大変な中であって後ろを振り返りつつも、少しずつ「前を向く」。

上掲のみことばにありますように、主イエスも十字架が待つエルサレムに向けて、前を向く、すなわち、「御顔をまっすぐに向けられ」ました。また、使徒パウロも、度重なる裁判の席上、決して後戻りすることはなく、最終目的地であるローマに向けて、前を向きました。すなわち、彼は「カイザルに上訴し」(使徒 25:11)たのです。

私たち人間はともすると後ろを向きがちです。心理学者エリック・エリクソンは言っています、「人は90%の過去とわずか10%の現在に生きている」と。ゆえに、主(の使い)はロトやその妻に言いました。「うしろを振り返ってはいけない」(創世記 19:17)。また、主イエスは、即座に従うことを躊躇する人に言いました。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません」(ルカ 9:62)。

ぜひ、私たちは大変な中にも少しずつ“前を向く”ことをして参りましょう。そんな私たちの前には必ず主が先立って下さいます。ゆえに、ダビデの如く「私はいつも、私の前に主を置いた」(詩篇 16:8)と告白させていただきます。また、「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでい」(へブル 12:2)きましょう。

置かれた場所で咲こうとすることの意義

「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」
(箴言 3 章 6 節)

カトリックのシスターだった渡辺和子さんの名著『置かれた場所で咲きなさい』は、キリスト教界のみならず、一般社会でも多くの読者を得ました。そして、多くの人々が、自分が置かれた場所、自分に与えられた環境で、腐らずに、そこででき得る最善を尽くすことを誓ったのではないのでしょうか？

先日、閉幕いたしましたピョンチャン冬季オリンピックで、まさに、置かれた場所で咲く、すなわち、与えられた環境でベストを尽くすことの意義を改めて考えさせられる一コマがありました。それはスピードスケートのショートトラック女子 3000 メートル・リレーの 5～8 位決定戦でのことです。

優勝候補だったオランダは、準決勝で転倒し、惜しくも決勝には進めず、5～8 位決定戦に回ることになりました。メダルを逃したことで、選手たちのモチベーションもかなり下がってしまったのではないのでしょうか？しかしながら、オランダの選手たちは、置かれた場所、与えられた 5～8 位決定戦という環境で、最善を尽くしました。何と彼らは、世界新記録を達成したのです。5 位で世界新記録達成という奇妙な結果になりました。しかしながら、その後、もっと奇妙なことが起こったのです。

なんとそんなオランダ・チームに、銅メダルが転がり込んで来たのです。もちろん、それは世界新記録のためではありません。実は、決勝に進出していたカナダと中国が失格になり、それで五位のオランダが三位に繰り上がったのです。もし、オランダ・チームが腐って、5～8 位決定戦で手を抜いていたら、メダルはなかったでしょう。

ハローキティに口が描かれない訳

「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰が人を救うことができるでしょうか。」
(ヤコブの手紙2章14節)

ハローキティをご存知ですか？サンリオでデザインされた猫をモチーフにしたキャラクターで、向かって右側の耳に赤いリボンが付けられているのが特徴です。御茶の水にも、大ファンがいらっしやいますよね。

あのハローキティ、正確にはキティ・ホワイトには、実は口が描かれておりません。なぜなのでしょう？サンリオのホームページにある“いちごの王さまからのメッセージ”で、筆者であるサンリオの社長、辻信太郎さんは以下のように述べています。

みなさん、キティちゃんのお顔をよく見てください。キティちゃんにはお口が描かれていませんね。どうしてなのでしょう？目や耳やお鼻はあるのに、お口が描かれていない・・・それには理由があるのです。

実はそこには、やさしさや思いやりは口(言葉)で言うだけでなく、態度で示しましょう！というメッセージが込められているのです。

困っている人には、相手の気持ちになって自ら進んで手を差し伸べて助けてあげることが必要だと、キティちゃんは私たちにそっと教えてくれているのです。

信仰にも全く同じことが言えるのではないのでしょうか？上掲のみことばに身を正しつつ、私たちの信仰も、口(言葉)で言うだけでなく、態度でこそ示したいものです。

「自分の十字架を負う」とは？

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」（マタイの福音書 16 章 24 節）

日本におけるアシュラム運動(=祈りとみことばの静聴やその分かち合いの時を大切にする信仰復興運動)の推進者として知られる“ちいろば牧師”こと、榎本保郎牧師の著書を読み返していましたら、上掲のみことばに関する興味深い解釈が紹介されておりました。それによれば、「自分の十字架を負う」とは、あたかも、自分に課された苦難を引き受けるようにと解釈されがちですが、実のところ少し違うのではないかというのです。

確かに、私たちは十字架についてはおりませんし、それ以上に、十字架につけられる必要がありません。私たちが十字架につけられなくていいように、裁かれなくていいように、主イエス・キリストが私たちの代わりに贖いの十字架について下さったのではないのでしょうか？ゆえに、私たちが真に負うべきなのは、自分の苦難ではなく、むしろ、自分に対する主の十字架の恵みではないかというのです。つまり、自分のためになされた主の十字架の贖いと赦しの恵みをしっかりと覚え、それに応えていくことこそが、「自分の十字架を負う」ことに他ならないのではないのでしょうか？

そのように考えますと、私たちは何とか頑張って自分を捨て、無理して自分の苦難を背負うのではなく、むしろ、頑張る自分から解放されて、主の十字架に現わされる神の恵みをしっかりと受け留めつつ、それに喜んで応えていくということが求められているのではないのでしょうか？そのような中で、場合によっては、上掲のみことばに続くみことば(25 節)にありますように、主のために肉のないのちを失う(=差し出す)ことができ、真のいのち、霊のないのちを見い出すことができるのかもしれません。

宝の箱をあけて～賜物を活かす～

「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」

(ペテロの手紙第一 4 章 10 節)

キリスト降誕の際、東方の博士たちは特別な星に導かれてやって来て、幼子イエスを拝して、「宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげ」(マタイ 2:11)しました。一つの可能性として、これらの贈り物は、占星術師とも考えられている博士たちの商売道具だったと言われています。東方の博士たちは、メシア＝キリストに出会った大きな喜びゆえ、大切な商売道具を放棄して、彼らが帰って行った「別の道」(マタイ 2:12)に象徴される新しい歩へと出て行ったのかもしれませんが。いずれにしても、彼らは「宝の箱をあけて」、持っていたもの、与えられていたものを喜んで差し出しました。そして、それらは彼らの思いを越えて、イエス・キリストの王性(←黄金)、神性(←乳香)、そして、贖いの死(←没薬)を暗示するものとなったのです。

あの使徒パウロも、その「宝の箱をあけて」、彼に与えられていたものを喜んで神の前に差し出しました。それらを有効に用いたのです。パウロには、生粋のユダヤ人としての血が流れていましたし、ヘレニスト・ユダヤ人としてギリシア語を話す能力が与えられていました。さらに、パウロは、当時ユダヤ社会を含む地中海世界を支配していたローマ帝国の市民権を保持していたのです。このユダヤ人としての出自、ギリシア語使用、そして、ローマの市民権保持は、彼がその福音宣教を展開するにあたり、大いに意味があったのです。主はあらかじめそれらを備えていて下さいました。

同様に、神様は、あなたに、そして、御茶の水キリストの教会に、あらかじめ賜物を備えて下さっています。さあ「宝の箱をあけて」、それらを有効に用いましょう！

救いの喜びを分かち合うという使命

「『家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。』そこで彼は出て行って、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、町中に言い広めた。」

(ルカの福音書8章39節)

先日、チルドレンズホーム招待の後片付けを終え、所用で両国に出かけたのですが、改札を出るなり、凄まじいフラッシュに私は立ち止まらざるを得ませんでした。すると、目の前を大勢の記者たちやサインをねだるファンたちにもみくちゃにされながら、大相撲初場所で千秋楽を待たずして平幕優勝を果たした“栃の心”が歩いているではありませんか？欧州はジョージア(旧呼称：グルジア)出身の苦労人で、大ケガで幕下まで落ちた後、見事、復活を遂げた力士で、まさに、たった今、優勝を決めたばかりだったのです。「角界のニコラス・ケイジ」と言われる端正な顔立ちには満面の笑みが湛えられておりました。後のインタビューで、何度も周囲への感謝と自らの喜びを余すところなく正直に語る彼の言葉は、多くの人々を惹きつけたに違いありません。ちなみに、母国で生まれたばかりの愛娘「アナスタシア」は復活という意味です。

栃の心は大相撲の初優勝の喜びを分かち合いましたが、私たちキリスト者には、それに勝る救いの喜びを分かち合うことができるのです。栃の心は賜杯を抱いた喜びを分かち合いましたが、私たちキリスト者は永遠の命をいただいている喜びを分かち合うことができるのです。栃の心は幕下陥落の悪夢からの復活(=復帰)の喜びを分かち合いましたが、私たちキリスト者は絶望の滅びから救われた希望の喜び、また、死んでも生きるという真の“復活”の喜びを分かち合うことができるのです。

さあ、今週もぜひ、そんな救いの喜びを分かち合うという使命を果たして参りましょう！

ブラッドバリーした私たち

「このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」

(マタイの福音書 20 章 16 節)

まさに、上掲のみことばを地で行くような出来事が起こりました。今から 16 年前のソルトレークシティ・オリンピックでのことです。スケート種目のショートトラック 1000m に出場したオーストラリアのスティープン・ブラッドバリー選手はさほど期待はされていませんでした。ただ、一回戦は対戦相手にも恵まれ、接戦となり、幸運にも一位通過して準決勝へと駒を進めました。ところが、つづく準決勝では優勝候補を含む強豪ぞろいで、案の定、彼は終始、最下位の四位を滑走。上位二選手が決勝に進むため、決勝進出は絶望的と思われた終盤で一人の選手が転倒し、なんと三位でゴール。それでも決勝進出は無理なはずでしたが、転倒した選手を妨害したとして二位の選手が失格となり、ブラッドバリー選手は柵ぼたで決勝進出を果たしたのです。そして、五人の選手で争われた注目の決勝ですが、今まで幸運に恵まれた彼も、さすがに実力の差は歴然で、ダントツの最下位を疾走します。そんな諦めムードの中、先を滑る四人がゴール目の最終コーナーを曲がったところで、一人の選手がバランスを崩し転倒、集団で一緒に滑っていた他の選手も次々とドミノ倒しのように転倒し、ついにブラッドバリー選手の前には誰もいなくなり、何と彼は漁夫の利の勝利、奇跡の優勝を果たし、母国に南半球初の冬のオリンピック金メダルをもたらしたのです。

ちなみに、オーストラリアでは現在、彼にちなんで「ブラッドバリーする」という俗語があり、それは「信じられない祝福にあずかる」ことを意味するそうです。まさに、私たちクリスチャンは、神の恵みにより“ブラッドバリー”されたのですよね!?

隣人になる！ ～ホーム招待に向けて～

「『この三人の中でだれが、強盗に教われた者の隣人になったと思いますか。』彼は言った。『その人にあわれみをかけてやった人です。』するとイエスは言われた。『あなたも行って同じようにしなさい。』」

(ルカの福音書 10 章 36～37 節)

いよいよ今週の土曜日(1/27)に茨城県は那珂市額田にあります児童養護施設「チルドレンズホーム」の子供たちを招いて、主にある交わりの時を持つ、いわゆる“ホーム招待”の時が持たれます。御茶の水キリストの教会の創立に大きく関わった O.D. ビクスラー兄が、チルドレンズホームの草創期にも大に関わった関係もあって、この“ホーム招待”は始まり、そこには五十年以上の歴史と伝統があります。チルドレンズホームに詳しい鈴木信兄の記録の記憶によれば、大雪によるやむを得ない中止をはさんで、今回で 56 回目になるそうです。また、かつて御茶の水では「“ホーム招待”が終わらないと正月が来ない」とまで言われた、大きな教会行事の一つなのです。

ところで、なぜ、この“ホーム招待”は行われるのでしょうか？・・・誤解していただきたいのですが、これは教会が行なう(単なる)慈善事業ではないということです。普段、親や家族から離れて暮らすホームの子供たちが、たとえわずかな時間ではあっても、神の家族の温もりを少しでも感じてもらいたいために行なうのです。また、そのために、私たちが愛と信仰を発揮して、子供たち一人一人の「隣人になる」ことを実践する時でもあります。それゆえ、この“ホーム招待”においては、自分自身がどう思うか以上に、子供たちがどう感じるかを重視していただきたいのです。

もちろん、毎年この“ホーム招待”に関わった兄姉が異口同音に言うように「子供たちから元気をもらえる」ことは言うまでもありません。さあ、隣人になりましょう！

過去を用いて下さる主

「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、『主よ。私のような者から離れてください。私は罪深い人間ですから。』』と言った。・・・イエスはシモンにこう言われた。『こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです。』」

(ルカの福音書5章8節および10節b)

今、まだ新年の雰囲気の間、私たちはいい意味で過去と決別し、前をこそ向いて進んでいこうとしているのではないのでしょうか？それはそれでとても尊いことだと思います。何しろ、心理学者のエリック・エリクソンは「人は90%の過去とわずかに10%の現在に生きている」と言っているくらいですから・・・。

しかしながら、逆に、過去を全否定されてしまうのも、いかなるものでしょうか？よくクリスチャンになったばかりの兄弟姉妹に対して、主にある新しい人生のすばらしさを強調したいがために、過去を全て否定すべきであるかのように言うてしまうことがあるかと思います。確かに、勢いパウロがそのような言い方をしていること(⇒ピリピ3:8)も見受けられます。ただ、やはり、それもあくまで「キリストを知っていることのすばらしさのゆえ」なのです。むしろ、上掲の場面を通して、主は、私たちの過去をいい意味で用いられるお方であることを覚えたいと思います。すなわち、主はシモン・ペテロの生涯を全否定することなく、かつての漁師としての歩みを活かして、魚をとる漁師から人間をとる漁師へと召されているのです。パウロの過去をも主が用いられたことは言うまでもありません。その律法(=旧約聖書)や(ユダヤ教)信仰への熱心さを、キリストを宣べ伝える伝道者として大いにお用いになったのです。・・・そして、もちろん、あなたの過去も！

どこから来て、どこへ行くのか？～歴史に学び、ビジョンを抱きつつ、今を生きる～

「主の使いは、荒野の泉のほとり、シュルへの道にある泉のほとりで、彼女を見つけ、『サライの女奴隷ハガル。あなたはどこから来て、どこへ行くのか。』と尋ねた。」
(創世記 16 章 7～8 節)

主にあつて新年おめでとうございます。今年も何卒よろしくお願ひいたします！ちなみに、今年 2018 年は、御茶の水キリストの教会がこの地に誕生して、七十年の節目を迎えます。言うなれば、教会創立七十周年ということになります。

このような節目の時は、往々にして、過去の栄光に浸ったり、あるいは、お祝いムードに浮かれる傾向があるものです。しかしながら、私たちは決してそのようなことにのみ終始することなく、むしろ、大いに過去の歩みから教訓を得、また、しっかりと将来の展望を見据えつつ、“今” いかに行動すべきかをこそ、じっくりと考えたいと思います。そこで今年のテーマ「歴史に学び、ビジョンを抱きつつ、今を生きる」。

上掲のみことばには、あのアブラ(ハ)ムの妻サラ(イ)の女奴隷ハガルが主人のもとを追われ、身重であったにも関わらず故郷エジプトへ至る荒野を一人寂しく彷徨っていた時に、主の使いによって呼び止められ、問い掛けられた問いが記されております。すなわち、主(の使い)はハガルに対して、その名を呼び、「あなたはどこから来て、どこへ行くのか」と問うているのです。

ここで主は、まず第一に「どこから来て」、即ち、なぜこうなったのか、過去を顧みてみなさいと問うています。そして、第二に「どこへ行くのか」、即ち、今後どうするつもりなのか、将来のことを熟慮しなさいと促しています。そうして、“今” どうすべきかを考えて行動しなさいとおっしゃっているのではないのでしょうか？